

集え若人は 夏の京都へ

●地元開催の IAU 総会＝千載一遇のチャンス

既に皆様ご存じの通り、今回の IAU 総会は、来年の 8 月下旬の夏の暑い盛りに、よりもよって一番暑い京都で開催されます。しかし会場となる国立京都国際会館は、それとは知らずにやってくる世界の著名な天文学者たちの熱気に包まれるに違いありません。このような国際的な集まりが国内で催されること、これは地理的に離れた島国にいる金も業績もない若手研究者が世界に頭角を現すための千載一遇のチャンスだといってよいでしょう。

IAU 総会が通常の国際研究会と違うのは、天文学のいろいろな分野の研究者が一同に集まることにあります。超有名な研究者と遭遇できる確率が非常に高いのです。隣で汗を拭いている人の良さそうなおじさんがノーベル賞学者だったりします。これには単純に感激できます。しかも、今度開かれる京都 IAU 総会では、前回の Hague 総会での成功例に学び、いくつかの IAU シンポジウムとジョイントディスカッションが同時に開催されます。旅費と宿泊費とわずかな額の参加費を払えばこれらの研究会に参加できるので、年会などに（失礼！）参加するよりもはるかにコストパフォーマンスに優れているように私には思えます。

●ホストとしての誇り

「実働部隊」と呼ばれる若手研究者にとって、地元で開催される国際研究会に参加することの意義は、ホスト国の研究者として応分の役割を担うことにあります。難しい実務は手に余りますが、それでも若手にできることはたくさん残されています。例えば、総会やシンポジウムに参加する外国人研究者の大部分にとっては、おそらくこれが初めての来日です。私たちが初めて海外に出たときに、彼らの多くは馴れない日本の風土、習慣、文字、反対車線を爆走してくる車、そしてほとんど通じない英語など、さまざまなことに興味を

持ち、また戸惑いをおぼえることでしょう。多くの日本人研究者が彼らと共に過ごすこと、それだけを取り上げてみても、若手研究者が総会の成功に向けて果たす役割は大きいといえます。

私自身もこれまで何度か国際研究会の運営のお手伝いをしたことがあるのですが、このようなホスト役を通じて、副産物として相手に顔を覚えてもらえることがよくあります。これは決して馬鹿にならないメリットだといえるでしょう。

●ポスター会場にて

もちろん、せっかくの IAU シンポジウムですから研究内容についても活発な議論を交わしたいものです。ところが日本人特有の奥ゆかしさを備えた無名の新人にとっては、議論を始めるまでが大変です。そこで利用したいのがポスターです。

ポスター会場は研究者個人同士の出会いに満ち溢れています。自分の研究内容について紹介し、議論をするためのまたとない機会ですから、タネとなるポスターは絶対に用意しておくべきです。会場の広さにもよりますが、複数のポスターでも受け付けてくれると思います（私自身は 4 枚出したこともあります→これはちょっと非常識）。研究として完成していなくても、著名な先生方に揉んでもらうために出しても大きな支障はないでしょう。できれば見るものを魅了するような優れたプレゼンテーションのポスターを準備したいものです。論文のコピーを貼ってそれで終わり、というのは避けたほうがよいようです。

掲示されているポスターの多くはプレプリント請求の記入欄を備えています。興味を持ったポスターには自分の名前と所属、e-mail アドレスなどを記入しましょう。プレプリント送付リストに加えてもらえるはずですが、このとき厄介なのは、掲示板に張り付けてある紙（記入欄は足元にあることが多い）に名前などを書かなければならないことです。これは書く方ももちろん大変ですが、それを後で解説する方も大変です。そこでお勧めしたいのが、自分の名前や連絡先を記入した 2 cm × 10 cm 程度の横

長のシールを予めワープロなどで用意しておき、会場ではそれを貼るだけ、という方法です。こんなことでも手間暇がだいぶ省けます。

●シンポジウム会場にて

研究会はシンポジウムとジョイントディスカッションからなります。国内の普通の研究会と似たりラックスした雰囲気が進められますので、特別にフォーマルな服装は必要ないようです。Tシャツで登壇する人もときどき見受けられます。

シンポジウムは大体 200 人程度の参加者で行われ、比較的広いテーマについて多角的に取り組むような構成になっています。シンポジウム会場では一体何をすればよいのでしょうか。もちろん講演内容を全て理解できればよいのですが、私個人の経験によると、その分野にあまり familiar でない場合(通常の、あまりできのよくない学生の場合がこれに相当)には、講演内容が理解できる割合は半分程度です。一つの講演に集中すると次の講演ではイントロの段階から落ちこぼれて一回休み、というのがよくあるパターンです。こんな時にお勧めなのが似顔絵描きです。総会では短期間のうちに非常に多くの人と出会うので、初めのうちは名前と顔が一致しないものです。この混乱を避けるために、絵心のある人は丁寧に、そうでない人もそれなりに、ノートの講演者の名前の脇に似顔絵を添えて描いてみましょう。性別、体格、髪の色、眼鏡、髭などの特徴をメモしておくだけでも、後でポスター会場や懇親会会場でその人を検索するとき大いに

役に立ちます。

一方、シンポジウムよりも細分化されたテーマについて深く掘り下げて議論するために開かれるのがジョイントディスカッションです。テーマの数が多い(前回の場合 20)ので、興味にマッチするものが複数開かれているはずですが、参加者の人数が少なめでインフォーマルな感じで進行されますので、質問などもかなり気軽にできる雰囲気です。

●そして懇親会会場や会場周辺にて

国際研究会の多くでは、懇親会やツアーなどのイベントが準備されています。懇親会の会費は経済的に恵まれない学生にとっては痛い出費ですが、せっかくですから思い切って参加してみたいかでしょうか。また、今回の場合には当てはまらないかもしれませんが、観測所へのツアーがある場合にはそれに参加することをお勧めします。後から振り返ると研究会自体よりも勉強になっていたりますので。

とにかく地元開催のこの総会では、私たちは単なるさえないヒヨッコ研究者ではありません。会場の中で、そして外でも、いろいろと貴重な経験が待ち受けていることでしょう。来年の夏には、総会を、そしてその他のたくさんのイベントを、海外からの参加者たちとともに大いに盛り上げ、大いに楽しもうではありませんか。

すべては京都に足を向けることから始まります。

阪本成一(国立天文台野辺山)

ISO ファーストサイエンスワークショップ First ISO Science Workshop

昨年 11 月 17 日に打ち上げられた赤外スペース天文台(Infrared Space Observatory, 以下 ISO, ISO については、天文月報 Vol. 86 (1993) pp. 54 ~ 58 を参照)の科学的成果を紹介する上記表題のワークショップが、5 月 29 日から 31 日の 2.5 日間、オランダ、ノルドヴァイク(Noordwijk)のエステック

(ESTEC¹)にて開催された。参加者は 260 名を超え、講演数は約 60、ポスターは約 45 にのぼり、2.5 日ではもの足りないほどの盛会であった。日本人の参加者は、筆者らの他、スペイン、ヴィルSPA(VILSPA²)で ISO データ取得に従事する川良とグローニンゲン滞在の山村の 5 名であった。(本稿では、敬称は略させていただきます。)なおこのワークショップの集録としては、A. & Ap. が予定